

3月2日(土)

令和六年度 B日程入学試験問題

文学部（日本文学科・中国文学科・史学科）、人間開発学部

古典（古文・漢文）

—注意事項—

- 1 問題は1ページから12ページ、解答用紙は一枚である。
- 2 解答はすべて別紙解答用紙に記入すること。
- 3 試験時間は六〇分である。

次の文章は『源氏物語』の一節である。入道が、都に上る家族と別れる場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。(60点)

入道、例の後夜ごやよりも深く起きて、鼻すすりうちして、行いひましたり。いみじう言忌ことじすれど、誰も誰もいと忍びがたし。若君は、いともいともうつくしげ(一)に、夜光りけむ玉の心地して、袖そでより外ほかには放ちきこえざりつるを、見馴なれてまつはし(1)。たまへる心ざまなど、ゆゆしきまでかく人に違たがへる身をいまいましく思ひながら、片時見 たてまつらではいかでか過ぐさむとすらむと、つつみあへず。

「行く(x)さきをはるかに祈るわかれ路ぢにたえぬは老おいの涙なりけり

いともゆゆしや」とて、おしのごひ隠す。尼君、

もろともに都は出いできこのたびやひとり野中の道にまどはむ

とて泣きたまふさまいとことわりなり。こころ契りかはして積もりぬる年月のほどを思へば、かう浮きたることを頼みて棄てし世に帰るも、思へばはかなしや。御方、

「いきてまたあひ見むことをいつとてかかぎりもしらぬ世をばたのまむ

送りにだに」と切せちにのたまへど、かたがたにつけてえさるまじきよしを言ひつつ、さすがに道のほどもいと(d)うしろめたなき気色けしきなり。「世の中を棄てはじめしに、かかる他ひとの国に思ひ下り、はべりしことも、ただ君の御ためと、思ふやうに明け暮れの御かしづきも心になふやうもやと思ひ、たまへたち(4)、しかど、身(二)のつたなかりける際きはの思ひ知らること多かりしかば、さらに都に帰りて、古受領ふるずらうの沈めるたぐひにて、貧しき家の蓬よもぎ葎むらぎどものありさまあらたむることもなきものから、公おほやけわたくし、私わたくしにをこがましき名を弘ひろめて、親の御亡なごき影かげを辱はづかしめむことのみみじさ(三)になむ、やがて世を棄すてつる門出かどでなりけりと人にも知られ(四)にしを、その方(e)につけてはよう思ひ放ち(五)てけりと思ひはべるに、君のやうやうおとなびたまひもの思ほし知るべきにそへては、(f)なにかう口惜くちやくしき世界よこにて錦を隠かくしきこゆらむと、心の闇晴くらくられ間なく嘆きわたりはべりしままに、仏神を頼みきこえて、さりとともかうつたなき身にひかれて山がつの庵いほひにはまじりたまは(六)じと思ふ心ひとつを頼みはべりしに、思ひよりがたくてうれしきことどもを見たてまつりそめても、なかなか身のほどをとさまかうざまに悲しう嘆きはべりつれど、若君のかう出でおはしましたる御宿世おくせの頼たのもしさに、(g)かかる渚なづなに月日を過あやぐしたまはむもいとかたじけなう、契りことにおほえたまへば、見たてまつら(七)ざらむ心まどひはしづめがたけれど、この身は長く世を棄てし心はべり、君たちは世を照らしたまふべき光しるければ、しばしかかる山がつの心を乱り

たまふばかりの御契りこそはあり^(ハ) けめ、天に生まるる人の、あやしき三つの途^(ミチ)に帰るらむ一時に思ひなずらへて、今日^(けふ)長く別れたてまつりぬ。命尽きぬと⁽⁵⁾ 聞こしめすとも、後のこと思^(おも)しいとなむな。さらぬ別れに御心動かしたまふな」と言ひ放つものから、「煙^(けむ)りともならむ夕^(ゆふ)まで、若君の御事をなむ、六時の勤^(らくじ)めにもなほ心きたなくうちまぜはべりぬべき」とて、これにぞうちひそみぬる。

(注) ○後夜―夜半から朝までの間。 ○若君―入道の孫娘。御方の娘。 ○夜光りけむ玉―闇夜にも光を放つという宝珠。

○尼君―入道の妻。 ○御方―入道の娘。 ○君―御方に同じ。 ○古受領の沈めるたぐひ―落ちぶれた元の国司の類。

○心の闇―「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(『後撰和歌集』)による。

○六時の勤め―一昼夜のうちの六つの時刻に行われる勤行。

問一 傍線部(1)～(5)の敬意の対象の組み合わせとして最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 1 にマークしな

さい。

ア	(1) 若君	(2) 入道	(3) 御方	(4) 若君	(5) 御方
イ	(1) 若君	(2) 若君	(3) 御方	(4) 御方	(5) 御方
ウ	(1) 若君	(2) 若君	(3) 御方	(4) 御方	(5) 若君
エ	(1) 入道	(2) 若君	(3) 尼君	(4) 御方	(5) 若君
オ	(1) 入道	(2) 入道	(3) 尼君	(4) 入道	(5) 入道

問二 傍線部 (a)・(d) の意味として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中からそれぞれ一つずつ選び、(a) は解答欄 2 に、(d) は

3 にマークしなさい。

(a)

2

ア 勤行していらつしやる
イ 掃除していらつしやる
ウ 食事していらつしやる
エ 歌を詠んでいらつしやる
オ 旅支度をしていらつしやる

(d)

3

ア 気にさわる様子
イ 気がかりな様子
ウ 気にならない様子
エ 気がつかない様子
オ 気のやすまる様子

問三 傍線部 (b)・(f)・(h) はどのようなことを述べているのか。最もふさわしいものを、次の ア～オ の中からそれぞれ一つずつ選び、(b) は

解答欄 4 に、(f) は 5 に、(h) は 6 にマークしなさい。

- (b)
- 4
- ア 袖の中に入れて持ち運んでいた、ということ。
イ 袖から放すことなく抱いてばかりいた、ということ。
ウ 袖の外には光を放たないようにしていた、ということ。
エ 衣装のことは袖についてしか聞いたことがない、ということ。
オ 衣装については袖以外は自由にさせていた、ということ。

- (f)
- 5
- ア どうしてこんな^{へんび}辺鄙な海辺に高貴な若君を連れてきてしまったのか、ということ。
イ どうしてこんな情けない世界で官位を棄てて出家してしまったのか、ということ。
ウ どうしてこうもつまらない土地に美しい娘を隠しておかなければならないのか、ということ。
エ どうしてこんな粗末な家に高価な装飾品を隠しておかなければならないのか、ということ。
オ どうしてこうも寂しい場所で自分の身分を隠しておかなければならないのか、ということ。

- (h)
- 6
- ア この度の自分との別れを気に留めるな、ということ。
イ この度の自分との別れを忘れてはならない、ということ。
ウ いつか自分がこの世を去っても動揺してはならない、ということ。
エ いつか自分がこの世を去ったら動揺するだろう、ということ。
オ いずれ若君との別れが訪れても心静かに過ごすように、ということ。

問四 傍線部 (c) はどのような気持ちを表しているか。最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 にマークしなさい。

- ア 再び会える日が来るとは限らない世なのに、見送ることさえ禁じられた状況を嘆く気持ち。
- イ 再び会える日が来ますようにと歌を詠んだが、その歌を送ることさえできずに悲しむ気持ち。
- ウ 再び会える日が来るようにとの願いを込めて、せめて歌だけでも送り返してほしいと望む気持ち。
- エ 再び会える日が来るのかどうか、定かではない世なので、せめて見送りだけでもしてほしいと願う気持ち。
- オ 再び会える日がいつになるのか、定かではない世なので、せめて神仏に供物を捧げて祈ることを求める気持ち。

問五 傍線部 (e) が表している内容として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 にマークしなさい。

- ア 世を棄てること
- イ 妻と離縁すること
- ウ 娘を養い育てること
- エ 公私に名を広めること
- オ 親の名誉を傷つけること

問六 傍線部 (g) のように思うのはなぜか。最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 にマークしなさい。

- ア 天で生まれた人には似つかわしくない場所であるから。
- イ 入道はこの閑静な土地には馴染めずにいるから。
- ウ 尼君はもつと賑やかな場所で暮らしたいと希望しているから。
- エ 御方は娘が宮中に仕えることを夢見ているから。
- オ 若君には格別な宿縁があると思われるから。

問七 本文中の和歌(X)の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 10 にマークしなさい。

ア 入道との別れを惜しみ涙を流す尼君の姿を見て一緒に都に行くことを躊躇ちゆうちゆうしている御方の思いを詠んだ歌。

イ 若君の将来の幸福を祈りながらも別れの悲しさに涙がとまらないという入道の思いを詠んだ歌。

ウ 涙がとまらない入道の様子を見て都への出立に迷いを抱いてしまった若君の思いを詠んだ歌。

エ 若君の旅の無事を祈りながらも都での暮らしに不安を感じずにはいられない尼君の思いを詠んだ歌。

オ 御方の都での幸福を祈りながらも安全に旅を終えられるかどうか心配でならない入道の思いを詠んだ歌。

問八 本文中の和歌(Y)に込められた心情の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 11 にマークしなさい。

ア 夫と一緒に都に出てきたこの旅であるが、これといった当てもなく行き先も分からないという不安。

イ 仲間と一緒に都に出てきたこの旅であるが、途中で道に迷ってしまったという動揺。

ウ 都から出てきた時は多くの仲間と一緒にであったが、今回は一人旅なので迷子にならないかという心配。

エ かつて夫とともに棄ててきた都に今度は一人で戻ることになり、どうして良いか分からないという困惑。

オ 夫と一緒に都を出てきたが、短期間で夫は再び都に戻ってしまい、一人残されたことに対する不満。

問九 二重傍線部(一)・(三)・(四)の文法的説明として最もふさわしいものを、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、(一)は解答欄 12 に、(三)は 13 に、(四)は 14 にマークしなさい。

ア 格助詞 イ 接続助詞 ウ 完了の助動詞 エ 断定の助動詞 オ 動詞の活用語尾

カ 形容動詞の活用語尾

問十 二重傍線部(二)・(五)・(六)・(七)・(八)の助動詞の意味として最もふさわしいものを、次のア～クの中からそれぞれ一つずつ選び、(二)は解答欄 15 に、(五)は 16 に、(六)は 17 に、(七)は 18 に、(八)は 19 にマークしなさい。

ア 打消 イ 過去 ウ 完了 エ 受身 オ 推量 カ 現在推量 キ 過去推量 ク 打消推量

問十一 本文の内容に合致するものとして最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄

20

 にマークしなさい。

- ア 入道が一緒に行かないことを若君には隠していたが、皆は黙っていることができなかった。
- イ 御方は都に上った後、かつて都落ちした入道の無念を晴らそうとしている。
- ウ 尼君は娘が都に上った後に古受領の世話になることを苦々しく思っていた。
- エ 入道は自分が生きているうちは定時の勤行の際に若君のことも祈ろうと言っている。
- オ 入道は尼君が亡くなったらその際には手厚く葬儀を行ってほしいと頼んだ。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、問いの都合で返り点・送りがなを省いた部分がある。(40点)

蝮ふ者者、善ク負フ小虫也。行キ遇ヘ物物、輒ニ持シ取テ、印ア其ノ首カ負フ之ヲ。背ハ
 愈ユ重ク、雖モ困ク劇ハ不レ止メ也。其ノ背ハ甚ダ洪ニ、物物積ミ困リ不レ散ゼ、卒ニ躓ツ仆レ不レ
 能ハ起ツ。人人或イ憐レ之ヲ、為ニ去ル其ノ負フ。苟カ能ク行カ、又又持シ取テ如レ故ノ。又又好ミ上ル
 高キ極メ其ノ力ヲ不レ已マ、至ル墜チ地ニ死ス。今今世世之ノ嗜タ取ル者者、遇ヘ貨ハ不レ避ケ、以テ厚ク其ノ室ヲ、不レ知ラ為ル己ノ累ト也。
 唯ダ恐ル其ノ不レ積マ及ン其ノ怠ツ而シ躓ク也。黜チ棄シ之ヲ、遷セ徙ス之ヲ、亦タ以テ病ム矣。
 苟ク能ク起タ、又又不レ艾ヤ日ヒ思ヒ高ク其ノ位ヲ、大ク其ノ禄ヲ而シ貪タ取ル、滋シ甚ク以テ近ツ
 於レ危ニ墜ル。觀ル前ノ之ノ死亡、不レ知ラ戒ム。雖モ其ノ形ハ魁ク然ゼ、大ク者也、其ノ名ハ
 人ト也。而シ智ハ則チ小虫也。亦タ足ル哀レ夫ノ。

(『柳宗元集』)

(注)

○ 蝻 — 虫の名。

○ 洪 — ゆがむ。

○ 室 — 家財・資産。

○ 怠 — 精神的に疲れる。

○ 黜棄之、遷徙之 — 罷免され、左遷される。

○ 貪取 — むさぼり取る。

○ 危墜 — 破滅。

○ 魁然 — 大きなさま。

問一 波線部 (X) と (Z) の送りがなを含めた読み方として最もふさわしいものを、次の ア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、(X) は解答欄 に、(Y) は に、(Z) は にマークしなさい。

<input type="text" value="21"/>	(X) 輒			
ア	それ	イ	すなはち	ウ
エ	むしろ	ウ	すでに	イ

<input type="text" value="22"/>	(Y) 愈			
ア	たまたま	イ	しばしば	ウ
エ	いよいよ	ウ	そもそも	イ

<input type="text" value="23"/>	(Z) 苟			
ア	ただ	イ	むしろ	ウ
エ	いやしくも	ウ	いささか	イ

問二 傍線部 (a) の解釈として最もふさわしいものを、次の ア～エの中から一つ選び、解答欄 にマークしなさい。

- ア このように物を背負うのである。
- イ 以前のように物を背負ってしまう。
- ウ 物を背負う前のようになくなってしまふ。
- エ 以前から物を背負っていないかのようなようである。

問三 傍線部 (b) の解釈として最もふさわしいものを、次の ア～エの中から一つ選び、解答欄 にマークしなさい。

- ア 自分の築きあげたものの素晴らしさを知ろうとしない。
- イ 自分がどれだけ豊かになるのか想像できない。
- ウ 自分がどれだけのことをしてきたのか気づかない。
- エ 自分にとって災いになりかねないがわからない。

問四 傍線部(c)の解釈として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、解答欄 26 にマークしなさい。

ア 自分が失ったものを、もう一度取ることをあきらめない。

イ あわれに思った人が、蝨の背負ったものを取り除くことをやめない。

ウ 倒した人が、相手を攻撃するのをやめない。

エ 自分の背負ったものを捨てるのをやめない。

問五 傍線部(d)が指すものとして最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、解答欄 27 にマークしなさい。

ア 近い将来死ぬ可能性のある人の例

イ 自分と同様の生き方をした結果死んだ人の例

ウ 金銭の恨みを買って死んだ人の例

エ 過労がもとで死んだ人の例

問六 傍線部(e)のように述べるのはなぜか。最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、解答欄 28 にマークしなさい。

ア 蝨が人間になりたいと思っても、小さな虫であることに変わらないから。

イ 蝨のように必死で努力をしても、高い地位や財産を得られないから。

ウ 見た目は立派な人間の姿をしていますが、その中身は蝨同然であるから。

エ 危険が迫っていると忠告しても、蝨の浅知恵だと思われてしまうから。

問七 筆者の考えとして最もふさわしいものを、次の ア～エ の中から一つ選び、解答欄

29

にマークしなさい。

- ア 高位を求め資産を増やそうとする人々を、蝨蠅のようであると批判している。
- イ 人々を蝨蠅のように苦しみ働かせて、利益を得ている者を批判している。
- ウ 重荷を運び続ける蝨蠅を観察して、苦しい境遇に生きる自分を励ましている。
- エ 重荷に苦しむ蝨蠅を見るに忍びずに、立ち去ってしまったことを後悔している。